

エンタープライズ領域で先行する IBM Cloudで、 お客様のビジネスを強力に支援



日本アイ・ビー・エム株式会社
取締役 専務執行役員
IBMクラウド事業本部長

三澤 智光

クラウドを取り巻く環境の変化

企業のビジネスを支えるエンタープライズ・ワークロードの9割近くは、SoR (Systems of Record) の定型的な業務処理システムだと言われています。これらのシステムはこれまでオンプレミス環境での活用が一般的であり、一部の限られた先進企業のみがクラウドを活用していました。近年、そうした状況が大きく変わり始めています。一般企業の間でも、SoRのシステムを含むエンタープライズ・ワークロードをそのままクラウドへ移行しようとい

う機運が高まりつつあります。

同時に、従来からクラウドネイティブ・アプリケーションが利用されてきたSoE (Systems of Engagement) の情報活用システムを取り巻く環境も変化し始めています。特に、クラウドの“ベンダー・ロックイン”を回避したいと考える企業は増加してきています。クラウドが広く普及する中で、構築したアプリケーションが特定のクラウド上でしか動かないというのは非常に使いづらく、多くの企業は自由に選択できるオープンなマルチクラウドを求めています。

IBMのクラウド戦略—— SoR、SoEの両方のニーズに ハイブリッド/マルチクラウドで対応

このような企業のニーズに対応できるのが、「IBM Cloud」です。IBMは、コンシューマー・ワークロードやオフィス・アプリケーションをベースとしたクラウド・サービスではなく、当初からエンタープライズのニーズに向けたサービスを提供してきました。

例えばIBM Cloudでは、専有可能な物理サーバーがオンデマンドで調達できるベアメタル・サーバーを他のクラウドに先駆けて提供しています。ベアメタル・サーバーがあることで、オンプレミスのVMware環境やSAPによる基幹システムをクラウドへリフトできる「VMware on IBM Cloud」や「SAP on IBM Cloud」をお客様の求める規模に合わせて提供することができます。そして、データやセキュリティ、ガバナンスを守るといった、企業のクリティカルな要求にもいち早く対応してきています。

一方でIBMは、コンテナ・ベースのクラウドネイティブ開発を提唱しています。小さな疎結合サービスのコンテナを組み合わせる形でアプリケーションを構築し、オープンなKubernetesで管理するマイクロサービスを活用すれば、ハイブリッドや

マルチクラウドで自在にクラウドを選択してアプリケーションを実行することができます。

IBMはこれまで、DockerやKubernetesなどのコンテナ技術をベースにしたオープン・スタンダードなクラウドネイティブ・アプリケーションの普及に投資を続けており、2015年7月にはGoogleなどと主導してCloud Native Computing Foundationを発足し、並行して数多くのIBMミドルウェアのコンテナ化も実施しています。IBM Cloudでは、Kubernetesをベースとし、オンプレミスやファイアーウォールの内側でパブリック・クラウドの機能を実現できる「IBM Cloud Private」(以下、ICP)を提供しています。パブリック・クラウドでは「IBM Cloud Kubernetes Service」を提供しており、お客様のアプリケーションをどこでも実行することができるハイブリッド・クラウドを実現しています。さらに、Kubernetesをプラットフォームとしていることにより、他のクラウドとの間でもアプリケーションを移動することが可能となります。他社クラウド上にICPを導入し、IBM Cloudと自社オンプレミスとのマルチクラウド環境でクラウドネイティブ・アプリケーションを運用しているケースもすでにあります。

そしてもう一つ、IBMが注力しているのが、AI時代のためのデータ活用の取り組みです。AIのプロジェクトに取り組みされた多くのお客様が、多種多様なデータソースからAI利用に適したデータ整備の重要性を再認識しています。データ活用のためのプラットフォームをクラウドネイティブのテクノロジーでオンプレミスやファイアーウォールの内側で構築する「IBM Cloud Private for Data」、そしてパブリック・クラウドで利用する「IBM Watson Studio」を提供しています。

IBM Cloudの豊富な導入実績

IBM Cloudは、すでに多くの企業に採用されています。

今号のお客様インタビューでは、SoRのクラウド移行事例として、富士フイルム様のオンプレミスのプライベート・クラウドで運用してきたシス

テムの大半をVMware on IBM Cloudへ移行し、オンプレミスとIBM Cloudをシームレスに接続したハイブリッド・クラウドを構築した事例、SoEのクラウド・アプリケーション事例として、ネポン様の農業用環境制御機器のIoTクラウド・プラットフォームやIBM Watsonを活用したチャットシステムを構築した事例、さらにAI時代のデータ活用事例として、本田技術研究所様のエンジニアがクラウド上で自由にデータを分析・共有し、イノベーションを創出する場として、IBM Watson Studioを活用した“デジタル砂場”を構築した事例など、先進的な取り組みを紹介しています。

その他にも金融業界やエンターテインメント業界などでも実績があり、さまざまな業界にてIBM Cloudを活用いただいています。

IBM Cloudの強化に向けた取り組みを加速

IBMは現在、IBM Cloudのさらなる強化に向けた取り組みを加速させています。その中で、全世界に18カ所あるアベイラビリティ・ゾーン(データセンター)において、東京リージョンを含む世界6リージョンでマルチ・ゾーン・リージョン(MZR)を構築しました。これはリージョン内の3カ所以上のゾーン(データセンター)を冗長化し、ゾーン間を低遅延のネットワークで接続することで高い可用性と信頼性を実現するものです。また、関西地域での接続拠点も予定しています。国内のお客様により安心してIBM Cloudをご活用いただけるよう、今後も継続的な投資を続けていきます。

また、ブロックチェーン技術、量子コンピューター技術などの最先端技術をクラウド・サービスとして提供するための最先端の取り組みにも着手しています。

IBM Cloudは、エンタープライズ・ワークロードを実現するあらゆるサービスをいつでも利用できる状態で提供しています。そして、これらを活用したアプリケーション開発を支援するサービス・デリバリーの提供も可能です。IBMは一丸となって、IBM Cloudでお客様のビジネスを強力にご支援します。